終わりに

最初に、私たちが、なぜ「評価」を使わず「ふりかえり」という言葉を使ったのか説明しておきます。公の評価が数値によって計られることがよくありますし、改善の目的も数値で示されることが往々にしてあります。例えば、成績を五段階で評価する、あるいは利用者何名以上を目的とするというようにです。しかし、私たちは公民館活動の質を取り上げるときは数値化（だけ）ではふさわしくないと考え、数値化する評価と区別するために「ふりかえり」という言葉を使うことにしました。

しかし、ふりかえるという言葉通りに、ただ単にふりかえるという所作だけに意味を限定しては、その意義を表したことにはならないでしょう。なぜなら、現状を改善するためにふりかえるわけですから、ふりかえりは、計画→実践／活動→ふりかえり→課題の確認→計画→実践という循環の中にあるからです。その意味で、「ふりかえる会」という形を取らなくても、ふりかえりは常に行われる事業になるでしょう。

「公民館活動をふりかえる会」は、半年かけて準備されて行われました。そして、「公民館活動をふりかえる会」終了後、公運審はその成果と課題を明らかにするために討議を重ねました。その討議のために、記録が作られました。その記録はこの記録集に収録されています。

この記録を読んでいただいて、まず気づいていただきたいことは、公民館が全力を挙げて取り組んだことです。それは、四本の講座について行なわれた担当職員の報告に現れています。公民館の職員が、一人で自分がかかわった実践を雑誌などに発表することはありますが、公民館挙げて取り組んだ経験はそうあるものではありません。次に気づくことは、報告のあった講座ごとにグループに分かれて、討議が行われ、その討議の記録と参加者のアンケートがまとめられていることです。そこでは、率直な意見交換が行われ、これからの課題を考えるヒントがたくさんあると思います。これらの意味で、国立市公民館の力量が示された記録集だと思います。

しかし、残念なことに公運審では、議論百出で、それらをもとに共通に確認できることを見いだすにはいたりませんでした。そこには、討議されるべき柱が「はじめに」の「学習のダイナミズムをどのように可視化できるか」の柱として示されているように多々あり、それらに沿ったふりかえりの難しさに気づかされました。しかし、これから「ふりかえる会」を続けるか否かの参考にはなると思います。

第 31 期公民館運営審議会
富田和枝（委員長）、大串隆吉（副委員長）、今村和義、大井利雄、川田幸生、鈴木直文、高木裕子、龍野瑤子、鴇田美緒、深川彌生、古旗真幸、間瀬英一郎、三好紀子、若林秀一（２０１８年３月まで宮脇聡）、和智裕貴